

## シェヤー・ロータリーでいこう

横浜南 長井 盛至

R I B I の年次大会に、昨春秋、入江直祐 P G が会長の代理として英国の三地区に派遣され、その重大使命を見事に果して帰られた。

その報告は「友」十月号にも「R I B I 地区大会覚書」に詳述されている。

英国のロータリーは、よくスタディしてよくエンジョイする立派ないき方をしているという話にすっかり魅了され、私はロータリーを充実にするために、スタディの後によくエンジョイすることだ、と改めて頭の中に刻み込んだ。

ところが暫くして、ロータリアン誌にデービス前会長が「ロータリーの成長は全ロータリアンの責任である」という論文を出され、「そのためには世界中のロータリアンに共通に、しかも基本的に必要なニードが二つある。それは“need to share”と“need to serve”である」というのである。「サーブ」についてはよく了解されているが、「シェヤー」は耳新しく感じさせられた。

ところで「シェヤー」という言葉を注意してみても、福島慎太郎氏（東京）も“Tokyo Says Welcome”の中で、外国からのロータリアンに「東京では貴方方の忘れることのできないホスピタリティを用意しているので、貴方方は日本に来てロータリーをシェヤーしませんか」などと述べている。確かに「傾き合おう」などよりも「シェヤー」のほうがずっと響きがよく、端的でよく感じが出てくる。なぜ今まで日本のロータリーでは「シェヤー」という言葉を使わなかったかが不可解になった。

そこで入江 P G の言われた「ロータリーはスタディしてエンジョイするもの」に共鳴していた私は、それに「シェヤー」を加えて、「ロータリーは、スタディして、シェヤーして、エンジョイすべきもの」に訂正したいと考えた。

さてわれわれの例会で一番問題になっているものの一つに、食事をして、ひとの話の聴い

て、自分からは殆ど発言もせずに帰るロータリアンがいることである。この人達こそは、全く「シェヤー」の重要性を果さない人達である。「シェヤー」すればお互いに益し、愉しく、やがてそれが親睦につながるのである。

そういうわけで、これからは大いに「シェヤー・ロータリー」を強調して、その発展を図りたいものである。

（神奈川県・結核医）